46

昭和初期、二私立医専の創始について
―大阪高等医専、大阪女史高等医専―

○長門谷洋治[1]・坂上　俊之[2]

現在わが国には八〇の医学校がある。これらの設立年を大きく①第二次大戦まで（昭和一五年まで）②第二次大戦中（昭和一六年より二〇年）③戦後（新設医大、昭和四五年より五四年）の三にわけ、各々の数を示すと①二六、②二〇、③三四である。このうち①をさらに㈠明治末まで、㈡大正期、㈢昭和期にわけ、それを国・公・私立別に見ると㈠国一二、公一、私三　㈡国一、私四　㈢私五で小計では総数二六、国一三、公一、私一二となる。

すなわち戦前の数は国立一三、私立一二とほぼ拮抗している。ただそれを昭和三年時点で大学と専門学校にわけてみると国立はすべて大学、私立は大学三、医専九である。この医専のうち大正末までに創設されたのは東京女子医専（創立明治三三年）、帝国女子医専（大正四年）東京医専（大七）日大専門部（大一四）の四である。そして昭和二・三年の二年間に一挙に私立医専のみが五校許可された。認可順に記すと大阪高等医専、岩手医専、九州医専（久留米大学）、昭和医専、大阪女子高等医専である。短期間に五校の認可はそれまでになかったこと、とくに大阪には二校が認可された。以下この二校について触れる。むろん二校は別々に創始されたが、似たパターンが多い。

昭和二年二月、大阪高等医学専門学校（昭和二一年、大阪医科大学）設立。設立者は医師の吉津度（よしづわたる）初代校長　足立文太郎（京大名誉教授、解剖学）

昭和三年六月、大阪女子高等医学専門学校（昭和二二年、大阪女子医科大学、同二九年、関西医科大学・共学）設立。設立者は医師の濱地藤太郎。初代校長　和辻春次（京大名誉教授、耳鼻咽喉科学）

吉津度（大阪細菌研究所・梅田病院院長、立憲政友会所属代議士）大正一五年一〇月設立願書提出、翌年二月設立認可、その間四ヵ月。

濱地藤太郎（大阪扁桃腺病院院長）昭和二年六月創立事

務所設置、同三年一月設立認可申請、同年六月設立認可、その間五ヵ月。申請の特徴は女子医専であることで、当時女子医専は東京・帝国の二のみであった。

学校設立に必要なのは教授陣と施設である。両校は大阪府に設立されたが、主たる教授は京大から得た。京大との兼任も多いが、この面ではほぼ条件を充たした。しかし校舎建設は間に合わず両校とも第一回入学者の授業は仮校舎で始めている。

果せるかな両校とも、その性質は異なるが学校騒動が発生し、両理事者とも早期に退陣に追いこまれた。大阪高等医専では昭和五年一〇月に学園ストがおこり定員過剰の是正、入学寄付金の公表などを要求。理事長・主事（副校長）付属病院長を兼ねていた吉津は昭和七年すべてを辞した。大阪女子高等医専理事長　濱地も在任僅か一年三ヵ月で、経営難に陥ったことを理由に学校を去った。

騒動の最大の犠牲者は生徒である。ことに大阪高等医専の第一回生は卒業延期となり、警察が介入して放校となったものもあった。しかし両校とも初期の卒業者から、実力ある有名医人を多数輩出しているのは敬服の他ない。大阪高等医専からは戦場に多数の軍医を送り戦死・戦病者だけで三三五名を算した。

事情はわからないが、吉津、濱地ともやや申請をいそぎすぎたきらいはないか。また行政もやや安易に認可を与えたのではないか。しかし機を逸しては成るものも成らないこともある。事実大阪女子高等医専認可のあと私立医専の認可は絶えた。

両校はその後も多くの難関をくぐりぬけ、現在は淀川を隔てて高槻市と守口市という、直線距離ではそう遠くないところに本拠を置き、ともに創立七〇周年を越え、わが国有数の名門医大となった。両校とも今日創設者である吉津・濱地両氏を改めて評価する動きがあると聞く。

(1)大阪府豊中市）
(2)京都府城陽市）